

内地留学研修報告

I 研究テーマ「意見文産出過程における意味マップ活用の効果に関する一考察 —小学校5年国語科教材における意見文指導を通して—

II 研究内容

1. 問題・目的

文章を書けない子にも書きたいことはある。しかし、多くの場合「どのように書けばよいのかわからない」「書き出せない」という現状がある。「ことばを生み出すこと」への苦痛や困難感は、全国学力学習状況調査の児童の実態としても表れている。作文指導の再検討は教育現場での必須課題である。本研究では、学習者の困難感の解決のために、「書き手の頭の中で何が起きているか」という認知心理学の理論に注目し、塚田(2005)の国語科での語彙連想法「意味マップ法」を、作文の学習方略として使用する。書くプロセスに、「想」の明確化を促すための思考ツールとして意味マップを活用することを通して、意見文にどのような効果が表れるかを検討する。

2. 調査の方法

第5学年の児童30名を対象に意見文を調査した。調査は小学校の通常の国語授業時間内に行い、意見文を作成する1単元の授業及び指導を全て筆者が行った。意見文の指導過程の中の課題設定の場面(意味マップA)・構想の場面(意味マップB)・評価の場面(意味マップC)において意味マップを用いた。これら3枚は個人で作成させた。また課題設定の場面では、意見交流のためクラス全体で意味マップを作成した。これを「クラスルームマップ」とし、意見文のテーマに関する2つの立場で1枚ずつ作成した。以上4回の意味マップ作成が、児童の意見文にどのような効果をもたらすかを調査した。

3. 分析の結果と考察

(1) 量的効果

①総文字数による目標到達率②量(長さ)に困難を抱えている児童の文字数③記述時間以上3つの結果から、本調査で実施した意見文指導において、意味マップによる量的効果は、期待できると考えられる。

(2) 情意的効果

事前・事後の質問紙調査を中心に分析した。その結果「作文が得意でない」と回答した児童全員が意味マップを肯定的に捉えた。良さとしては、「自分が書くことを意識できて書きやすかった」等を挙げていた。また「どの場面での意味マップが役立ったか」の問いには、課題設定の場面が多く、中でも「意見(立場)を決定するとき」を挙げる児童が最も多かった。自由記述では、クラスルームマップに関するものが多く、「たくさんの意見を聞いてよかった」「いろいろな話題を知ることができてよかった」等、「意見や考えの広がり」に良さを感じた記述が目立った。それと共に、「一つの意見からいろんなことがつながっておもしろかった」「言葉から何がつながるかが分かった」等、「語のつながり」に良さを感じた児童もいた。さらに、「大きな紙にたくさんの人の考えが書いてあったことが良かった」と、語が連なっていく面白さについての記述も見られた。「形に残る交流」であるクラスルームマップが、個々では無理な「想」の部分を引き出す効果を生み出したのではないかと推測できる。

4. 総合的な考察

量的効果と情意的効果から、本調査において意味マップ法を取り入れた意図が認められた。しかし、質的効果に関しては、評価マップが内容のチェック機能を果たす可能性があることを示したものの、意味マップと文章との相関関係は見いだせず、課題として残った。意見文が成立するために必要なキーワードと連想語、また連想語の配列の規則性等、今後実践する中で検討していく必要がある。

(日川小学校 志村 貴美子)